

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520813

研究課題名(和文) 中華民国期における西北「回民軍閥」の基礎的研究：非漢人系「軍閥」の事例研究として

研究課題名(英文) An Introductory Research on the Muslim Warlords in Modern Northwest China

研究代表者

安藤 潤一郎 (ANDO, Junichiro)

東洋大学・アジア文化研究所・客員研究員

研究者番号：10597157

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、20世紀前半に中国の西北諸省で地域権力を築き上げた回民(=漢語系ムスリム・マイノリティ)出身の「軍閥」諸勢力に関し、近年新しく利用可能になった各種の資料を活用しながら、「少数民族」の背景を持つこれらの勢力はどのようなプロセスを経て、また、いかなる意識を帯びて台頭したのか、彼らはいかなる論理のもとに、どのような形で地域支配を進めたのか、また、彼らは中国国家と中国ナショナリズムの枠組みに対していかなる関係性を有していたのか、実証的に明らかにした。さらにそこから、近現代中国における民族/地域/国家の問題をめぐっての理論的な省察も試みた。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on the “Muslim Warlords” who established strong dominance over Northwest regions of China in the first half of 20th century and, using various new historical materials that have become available in recent years, examines: 1) how these warlords with characteristic ethno-religious backgrounds had emerged as strong military and political factions, 2) in what way and on what kind of power base (both substantial and ideological) they reigned over their territories, and 3) how were the relationship and interaction between their local lordship and the context of Chinese nationalism / nation-building. On the basis of the study above, some general and theoretical problems concerning to the “ethnic problems” in modern and contemporary China are also considered.

研究分野：人文学・史学・東洋史

キーワード：回民・回族 軍閥 イスラーム 多民族地域 地域権力 民族問題 日中戦争 国家統合との相補性

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、報告者が近 10 数年来取り組んできた、回民(回族:漢語系ムスリム)の事例を主な切り口としての「近現代中国の民族問題」に関する研究の一環である。

(2) 20 世紀初頭、中国大陸の西北諸省で台頭した馬姓の「回民軍閥」諸集団は、辛亥革命後、北京政府期の「軍閥」間の争闘と不安定な政治情勢に乗じて、寧夏・青海・甘肅一円に大きな勢力を築き、国民革命後、南京国民政府による支配体制が固まったあとも、地域権力を維持・強化し続けた。エスニシティと宗教を強固な基盤にしつつ、自律的な地域支配を維持するこれらの諸集団は、中華民国期の「民族問題」の文脈において、極めて重要な位置を占めた。

(3) それだけに、関連する先行研究は少なくなく、とりわけ、中田吉信氏、Jonathan Lipman 氏、許憲隆氏らの一連の著作・論考によって、西北「回民軍閥」諸集団のアウトラインはかなりの程度まで明らかになったと言える。

(4) しかしながら、いずれも外部的な視座からの分析が中心であって、各回民「軍閥」集団自体の視座からの議論はあまりなされておらず、このため、たとえば日中戦争期にこれらの諸集団はなぜ、日本による取り込み工作を拒み、西北諸省の統合強化を図る蒋介石政権に従い続けたのかといった問題について、整合的に説明しうる観点はほとんど提示されてこなかった。

(5) こうした先行研究の瑕疵は主に「回民軍閥」にかかわる史料・資料の「少なさ・手に入れにくさ」に由来した。だが、2000 年代末葉以降、回族史関係の大型史料叢書が相次いで刊行され始め、従来見つけにくかった内部的史料も大量に収録された。さらに、各地の図書館・档案馆(文書館)のオンライン目録の整備や公開度も拡大していった。

(6) それゆえ、新たに利用可能となった史料を用いて、「回民軍閥」諸勢力の台頭のプロセスと基本的性格、地域権力としての構造と特徴、中国国家との関係性を、彼ら自身の動向・立場に即しながら総体的に考証・分析することが、関連研究の現段階にあって不可欠であろうと考えられた。以上が、本研究を着想・計画するに至った背景である。

2. 研究の目的

(1) 上記のような基本的背景のもと、本研究では、先行研究を踏まえただうえで、新たな史料・資料の利用を基礎に、馬氏諸勢力はいかなる意識を帯びて台頭したのか?、いかなる論理のもとに、どう地域支配を

進めたのか?、中国国家に対していかなる関係性を有し、自らの宗教性・エスニシティと「中国」とをどう関連づけていたのか? という、これまであまり用いられてこなかった視点から、西北「回民軍閥」諸勢力の具体像をあらためて照射していくことを直接の目的・目標とした。

(2) 同時に、今後、たとえば雲南省主席の龍雲(=「イ族」出身)のような、他の非漢人系「軍閥」勢力も視野に入れた総合的な研究へ向けての基礎作業としての意味を持たせることもめざした。

3. 研究の方法

(1) 研究の方法としては、まずは新たな史料・資料の収集を進めるとともに、それらの史料・史料に立脚して、何よりも「西北「回民軍閥」諸集団自体に即した」視角から、次の三つの切り口に沿って考証・考察を進めた。

西北「回民軍閥」はいかなる意識を帯びて台頭したのか?

彼らはいかなる論理のもとに、どう地域支配を進めたのか?

彼らは中国国家/中国ナショナリズムに対していかなる関係性を有し、自らの宗教性・エスニシティと「中国」とをどう関連づけていたのか?

(2) 加えて、研究開始当初は、もし可能であれば、若干のフィールドワークを併用することも視野に入れた。ただし、こちらは実際には実施することはできなかった。

4. 研究成果

(1) 各年度を通じて、本研究の遂行の基本リソースとなる史料/資料の調査・収集をおこなった。この作業の過程においては、中国各地の図書館・档案馆なども訪れ、かなり網羅的な成果を得ることができた。入手しえた主な文献は、以下のとおりである。

- ・ 西北「回民軍閥」各勢力の系譜・族譜史料類。
- ・ 馬福祥・馬鴻逵・馬步芳ら各「回民軍閥」勢力リーダーの言論が記された公的文書や新聞・雑誌資料類。
- ・ 甘肅・寧夏・青海および華北各省の地方志と「文史資料」類。
- ・ 清末・中華民国期に著された西北諸省旅行記など。

(2) これらの史料を用いて、第一年度においては、研究の第一段階たる西北「回民軍閥」の形成過程と基本的性格についての考証・分析を進め、19 世紀中葉のムスリム反乱の中から形成された甘肅省河州地方の回民武装集団が、清末・中華民国初期の歴史的文脈の中で、どのように強力な軍事勢力へと成長していったのか、リーダーたちの意識・スタンスなどにも着目しつつ考察した。この作

業により、西北「回民軍閥」諸勢力勃興の政治的・社会的プロセスを詳しくあとづけたほか、そうしたプロセスは以下の各要因と密接に連関していた点も、具体的に明らかにすることができた。

多数のエスニック集団が「モザイク状に」混住する西北諸省の地域特性。

19世紀末の西北諸省の地域社会における「秩序の維持」をめぐる政治。

「回民軍閥」諸集団を率いる馬氏各家族の共通の郷里＝甘肅省河州の回民社会が有していた、羊毛・アヘンなどの交易活動との深いかかわり。

1890年代から1910年代にかけての中国国家の構造的転換と対外的危機がもたらした「近代的な」国家政治の西北諸省への浸透。

(3) 続いて、第二年度以降は、第二段階である西北「回民軍閥」の地域権力としての特徴に焦点を当てた考証・分析を、当初は第三段階として構想していた各「軍閥」集団と中国国家との関係性の考察とも組み合わせながら、主に寧夏馬福祥系と青海馬麒系の二つの勢力に焦点を当てて、具体的・実証的に進めていった。まず、両「軍閥」勢力の地域支配の基盤に関しては、以下の点が明らかになった。

両馬氏「軍閥」集団とも郷里である河州地方との紐帯を政治的・軍事的資源の中軸とする一方、馬福祥系集団の場合は北京政府期の「軍閥」諸派の争闘や国民革命のプロセスに、馬麒系集団の場合はチベットや新疆の「边防」問題に深くかかわることで、地域における中国国家の「代理者」たる地位を固め、そこから地域支配／統合のための正統性と力を調達していた。

また、経済的両勢力の経済的基盤としては、羊毛などの特産品の東部沿海地域へ向けた移出が重要な位置を占めており、これも、中国経済の広域的な構造と不可分に結びついていた。

ゆえに、実際の支配の形式と諸施策も、見かけ上の濃厚な「割拠的」色彩にもかかわらず、中国ナショナリズムの文脈との強い相補性を帯びていた。

(4) 一方、両馬氏「軍閥」集団の宗教・エスニシティをめぐる動きに関して、以下の点が明らかとなった。

両馬氏「軍閥」集団は、1920～30年代、都市部の回民社会で全国的に高揚を示した回民の「民族運動」の潮流と積極的にかかわり、各地の運動を支援するとともに、そうした運動の流れを、自らの地域権力の強化および地域統合の推進に「活用」した。

とくに、「近代主義」や中国ナショナリズムとも結びついたイスラーム改革

主義の主張は、支配地域の回民社会の統合と強化に利用された。

それは、スーフィー教団の抑圧政策をはじめ、地域の回民のイスラーム信仰の形や社会的・文化的伝統に対する積極的な介入としても表れ、回民社会にも大きな変容を引き起こした。

(5) 上述の一連の知見からは、日中戦争期の西北「回民軍閥」と日本との関係についても、下記のごとく、一定の整合的な説明が可能になる。

日中全面開戦後、華北や「蒙疆」の主要部は日本の占領下に置かれたが、西北「回民軍閥」諸勢力にとってきわめて重要であった、これらの地域の回民社会との経済的・社会的ネットワークは維持され続けていた。

このため、寧夏・青海両馬氏「軍閥」は日本側とも一定の連絡を持ち、重慶国民政府離脱(＝「民族的分離独立」)の工作に応じそうな「気配」さえ見せた。

しかし、彼らの地域権力の構造は中国国家の枠組みに大きく依存しており、しかも、日中戦争の進展に伴う「総力戦体制」への志向は、彼らによる「割拠的」な地域統合の推進とも、ある種の逆説的な共振性を有していた。

かくして、重慶国民政府が内陸諸地域「大後方」統合強化を試みる中でも、両「軍閥」勢力の地域支配はむしろ強化されていき、同時に、日本側の活発な取り込み工作にもかかわらず、両勢力とも、重慶政権の「抗日」の旗印のもとを離れることはなかったのである。

(6) 以上の成果に加え、本研究の実施を通じて、西北「回民軍閥」の地域権力を脅かした最大の「ライバル」は、日中戦争期に西北諸省に勢力を広げた中国共産党であり、彼らの勢力の解体は、単に戦後の国共内戦での軍事的敗北のみに起因するのではなく、1930年代中葉以降の共産党との対抗関係の中に、すでにさまざまな契機・要因が胚胎されていたことも見えてきた。今後のさらなる研究の一つの課題だと言ってよい。

(7) ただ、上記の研究成果の「公開」という面では、かなりの遅れが生じてしまい、現在のところ、複数の論文と報告書の形に取りまとめる作業を、なお継続中である。また、研究開始時に間接的な「目的」(* 上掲の「研究目的」(2)参照)として設定した非漢人「軍閥」の比較研究(およびそれにもとづく中華民国期の「民族/地域/国家」の問題の理論的考察)へ向けての視座の構築も、目下十分に進められてはいない。よって、平成27年度は別課題による科研費支給は受けず、これらの作業に専念する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

研究者番号：

〔雑誌論文〕(計 1件)

安藤潤一郎、日本占領下の華北における中国回教総聯合会の設立と回民社会—日中戦争期中国の「民族問題」に関する事例研究へ向けて、アジア・アフリカ言語文化研究、査読あり、第87号、2014、21-81。

〔学会発表〕(計 1件)

安藤潤一郎、Japanese Occupation and Chinese Muslims in North China in the Sino-Japanese War 1937-1945、第32回ドイツ東洋学会大会 (Der 32. Deutsche Orientalistentag)、ミュンスター大学、2013/9/24。

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況 (計 0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

安藤 潤一郎 (ANDO, Junichiro)

東洋大学・アジア文化研究所・客員研究員

研究者番号：10597157

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()